

室生寺金堂・本尊薬師（伝釈迦）如来立像の制作背景について

太田均*

要旨

室生寺金堂の本尊には、かねてより天台系の尊像である可能性と、体軀や衣文表現などに大陸様式の摂取が指摘されている。現在、この本尊は、円修が天台山への留学の帰国後に制作されたとする見解が有力で、そうであれば円修が室生寺整備のため何らかの目的を持ち、天台山留学を果たした可能性にも留意すべきかもしれない。しかし円修の室生入山後の事績を分析すると、留学の成果が直ちに本尊造像を結実したとは考えられず、むしろわが国での修学歴から留学前の造像の可能性も考慮すべきと考える。そこで奈良時代後期から平安時代前期にかけての、室生寺像と同趣の大陸的要素を継承する尊像についても考察し、さらに室生山寺の「前身寺院」を創建した賢璟について、天台思想の受容や大陸様式摂取の機会を見出しながら造像背景を論じる。

キーワード：室生寺・金堂本尊、賢璟、円修

はじめに

室生寺金堂に本尊として祀られる薬師（伝釈迦）如来立像（以下、「金堂本尊」と略称する）の制作時期に関しては、一方で像容や様式に大陸的な古様、他方で平安時代の新たな和様という、相反する点が認められることから、かねてより諸説が唱えられてきた。具体的には、金堂本尊に見られるいわゆる漣波式衣文の成立に関し、久野健氏が指摘されているように、奈良時代後半から頻出する翻波式衣文の形式化、退化と評するか、むしろそこに初発性を強く認め、積極的な評価を与えようとするかの論争があった。^① 近時においては、金堂本尊にインド・グプタ様式の影響などの大陸的要素が認められること、纏う大衣を朱色で彩る「朱衣金鉢」といった天台的性格を有することを認めつつ、その背景に、天台座主をめぐる円澄との争いのち室生に入山（八四三年）した円修が、その後果たした天台山禅林寺への留学・帰朝（八五〇）後に造像したとする見解が注目されている。^②

筆者は、すでに拙稿において、賢璟が宝亀五年（七七四）頃に室生前身寺院を創建したものと考えたことがある。³⁾ すなわち室生には、便宜的に承平七年（九三七）の『六一山年分度者奏状』（以下、『六一山奏状』）に見える「延寿法」の成就後に創建された「室生山寺」と、同奏状から想定できるその「前身寺院」、さらに金堂を主堂として創建された「室生寺」の三期の造営期が考えられ、賢璟は、延暦十二年（七



写真1 薬師（伝釈迦）如来立像（室生寺）正面



写真2 薬師（伝釈迦）如来立像（室生寺）背面



写真3 薬師（伝釈迦）如来立像（室生寺）右側面



写真4 薬師（伝釈迦）如来立像（室生寺）左側面

九三）に入滅するまでの約二十年にわたり前身寺院と室生山寺の整備に尽くし、あわせて天台的な宗教環境（以下、「天台の素地」）を室生に導入した可能性がある。⁴⁾ つまり、円修の室生入山を待たずに、造像に資するだけの天台の素地が室生に根づいていたとすれば、金堂本尊が彼の入唐前に制作されたとも想定してよいのであるまいか。

一 金堂本尊の概要とその造像背景

金堂本尊（写真1～4）は、国宝指定時の名称ならびに寺伝においては、釈迦如来立像とされる。⁵⁾ しかし、『六一山図』（正和三年・一二四）には「根本堂薬師佛」と記されており、また、同礼堂（寛文十二年修理）の募股には薬壺形の飾りが彫刻されていることから、そもそも薬師堂であった可能性が高く、本尊は薬師如来立像として制作されたものとする見方が有力である。⁶⁾

金堂本尊は、右手施無畏、左手与願の印を結び、薬壺を持たない。

『阿婆縛抄』「薬師」の項は、「秘説云。中堂薬師施願無畏也。忠師親奉見之、（中略）東寺金堂、並南京薬師寺像、揚右手垂左手」としたうえで、「或云和州室生薬師仏像同之云々。」と記し、本来薬壺を持たない薬師如来像であることを述べる⁷⁾。さらに、「朱衣金鉢」像が天台薬師の特色の一つであることは定説化しているが、近時、津田徹英氏は、「室生寺の宗色」につき、天台色を強めるだけでなく、興福寺別院として機能し（『一山奏状』）、真言の教学を擁する（真泰の室生入山）懐の深さを持ち得た可能性を指摘される⁸⁾。とすると、金堂本尊を天台薬師と解するためには、その制作背景を具体的に示す必要がある⁹⁾。

『天台座主記』には、最澄の弟子円澄と義真の弟子円修の間で天台座主をめぐる争論があり、承和元年（八三四）三月十六日、大衆におされた円澄が座主に任じられ、叡山を追われた円修の室生山寺移住のことを記す⁹⁾。毛利久氏によると、円修は、弘仁十年（八一九）に最澄の大乗戒壇設立に異を唱えて最澄と親交を絶った¹⁰⁾というが、それが円澄との争いの重要な要因になったものか否かは詳らかではない。円修が興福寺系の寺院であった室生山寺をあえて選んだのは、毛利氏が指摘されるように「何か天台をはぐくむ素地」のあったことが影響したのであろう。

この天台の素地は誰を端緒として醸成されたのかとなると、それは賢璟かその弟子修円のいずれかであることは論を俟たない。氏は、賢璟の室生寺創建が「ただ寺の基を開いた程度」であるのに対し、賢璟の弟子修円は最澄から灌頂を授かるなど「天台への接近がとくに目立つ

ている」とし、かかる素地の醸成には修円の関りを重視される¹¹⁾。

しかし、延暦十二年（七九三）正月朔、賢璟は最澄が檀主となつて催された叡山文殊堂の供養の際に導師を務め、衆僧の首座として重要な役割を担っている。修円が最澄から灌頂を受けたことも留意される¹²⁾が、天台への接近ということであれば、この賢璟の事績も無視することはできない¹³⁾。

賢璟は、宝亀九年（七七八）に室生山寺を創建した後、入滅する延暦十二年（七九三）まで、約二十年間の永きに渡り室生に止住している。室生山寺の主要な堂宇は賢璟の時代に整備されたとも見られ、天台の素地もまた、その間に醸成された可能性は十分にある。

なお、賢璟が叡山文殊堂の供養会において導師を務めた際、円修の師である義真が「咒願」を勤めているが、こうしてみると賢璟、義真、円修の関係は、近いものであったことが知られるであろう。

一方、修円もまた賢璟に師事して室生山寺の発展に寄与し、賢璟入滅後、五重塔を完成（八〇〇年頃）させている。修円は先述の通り、最澄から灌頂を受けており、興福寺出身でありながらも、天台的性格を具え、円修が室生に入山する承和元年（八三四）から翌年六月の修円入滅まで、一年三か月ほどの間、室生において住を共にしている。とすれば、室生における天台の素地は、賢璟、修円、円修とによって継承されたと考えてよいであろう。

このように天台の基盤が形成されていく中で、その中心仏たる金堂薬師如来像について、かねてより円修の入唐後に造像されたとする見

方があったが、以上のことを勘案すれば、それが円修の入唐前であっても大きな齟齬はないものと考えられる。このことを確認するため、煩瑣となるが円修の事績を取りあげる。

- ① 承和元年（八三四）
円修、室生寺へ移住す（『天台座主記』）
- ② 承和十年（八四三）頃
円修、弟子の堅慧とともに、唐・天台山禪林寺に留学す（『元享釈書』卷三〇）
- ③ 唐・会昌四年（八四四）
円修、唐で『大唐国日本国付法血脈図記』を受けられる（園城寺唐院蔵『大唐国日本国付法血脈図記』）
- ④ 承和十一年（八四四）
円修、帰国し西寺別院である慈恩院の別当に就任す（『続日本後紀』）
- ⑤ 貞観九年（八六七）
室生寺、「竜王寺」と号される（『六一山奏状』）



写真5 伝薬師如来立像（唐招提寺講堂旧蔵）

かりに金堂本尊を円修の唐帰国後の造像とすると、それは円修の室生入山から十年以上経てのことになるが、入唐した期間はわずか一年で、しかもその間に『大唐国日本国付法血脈図記』を受けられている。事実は、入唐以前に天台教学の大方を修学したと見ても不自然ではなからう。

では、円修の天台山留学の目的とその成果は、どのような点にあったであろうか。以下は推測の域に留まるが、最澄が入唐後に比叡山に構築した初期天台教学を、その発祥地である天台山で修学すること、具体的には、第一に、天台山系の天台宗、すなわち法華最第一の天台法華宗の修学¹⁵、第二には、最澄が山王信仰のモデルとした天台山国清寺山内の「地主山王 元弼真君」の実態認識にあったのではない¹⁶。とくに後者の確認は、のちの貞観九年に室生山寺が「竜王寺」と号して（『六一山奏状』）、龍穴神との習合をはかり、神宮寺化へ進展させるべき理念の礎を形成したと思われる。

ところで金堂本尊に関して、その像容はもとより、光背・台座の彩色図様等にも、中国やインドといった大陸様式の受容が従来から指摘されている。一例をあげるなら、衣文線の峰に沿って切金をおく手法が、永延元年（九八七）に奄然が宋から請来した清涼寺釈迦如来立像に同様の手法が見出せるということがある¹⁷。

こうした大陸的性格につき、毛利氏は、円修・堅慧が留学の際に学んだ可能性を指摘され、井上一稔氏は、金堂本尊に見られるグプタ様式の影響に着目し、円修の天台山への留学の際に承継されたことに賛

同される¹⁸⁾。しかし、筆者は前述の通り、造像を円修留学以前のことと考えており、次章では、円修が留学前に、そうした大陸様式を受容し得た事情について考察することとしたい。



写真6 薬師如来立像（鶏足寺）

二 金堂本尊の造形様式とその系譜

金堂本尊の造形は、両肩が張り、胸を盛り上げ、両腿を隆起させ、下腹から細かい衣文線がY字形をなし、両腿に沿って平行状に刻まれる。なかでも、量感表現は、唐招提寺講堂旧安置の薬師如来立像（以下、「唐招提寺薬師像」、写真5）に通じ、胸から腰、大腿部にかけての抑揚表現においても類似する。

しかし、唐招提寺薬師像の、隆起の強い衣褶は、金堂本尊の浅い衣文表現とは異質である。金堂本尊の特徴的な衣文表現については、それ自体に初発性を認めるか、あるいは唐招提寺薬師像などに見られる翻波式衣文の形式化と解するかについて、意見が分かれることはすでに述べた¹⁹⁾。この問題を克服するには、わが国におけるわずかな関係作例のみならず、大陸における造像例も含めた考察が必要になる。ここ

ではひとまずその問題は保留し機会を改めて検討することとし、あえて立体造形としての肉取り表現に着目することで、金堂本尊の造像時期が、承和十年の円修留学より前に遡り得るかについて考えたい。

唐招提寺薬師像は新しい造形理念に基づいたと考えられる代用白檀としてのカヤ材製像であるが、東野治之氏によると、その出現は鑑真に伴って渡来した唐の工人（雕檀師）の指導による結果であろうという²⁰⁾。後述するとおり、鑑真の影響を受けた賢璟が唐工人の造像に接し、それが修円・円修に伝わり、金堂本尊の制作につながった可能性がある。

しかし、鑑真が唐招提寺を創建したのは天平宝字三年（七五九）で、唐招提寺薬師像の制作から、円修の室生入山までには七〇年以上の間隔がある²¹⁾。したがって、金堂本尊が承和期に制作されたとするためには、唐招提寺像と金堂本尊に造形を通じるこの間の造像を示す必要があるが、ここでは一例として滋賀・鶏足寺の薬師如来立像（以下、「鶏足寺像」）に着目しておきたい²²⁾（写真6）。

鶏足寺像について西川杏太郎氏は、「肩は広く胸も腰も部厚く、すべてに量感豊かな堂々として姿に形造り、特に両腿から膝にかけては、前面の両足間に衣文線を集め、膝下で外側に流れるY字形の衣文を作つて腿の肉の隆起を強調し、力強さを示し」、こうした表現法は、八世紀の唐招提寺薬師像や九世紀の元興寺・薬師如来立像などのそれに共通するといふ²³⁾。

鶏足寺像における、堂々とした圧倒的なポリューム観、力強さを示

す両足間のY字形の衣文などの表現は、唐招提寺薬師像だけでなく、金堂本尊の表現にも通じるところがある。しかも、金堂本尊に顕著な薄い衣とそこに表される平行線状の衣文表現は、鶏足寺像にもその片鱗が見て取れよう。

西川氏は、唐招提寺薬師像と類似の表現法に加え、奈良後期から平安初期の木心乾漆像のような柔軟な肌合いを見せることを示されたうえで、鶏足寺像の制作時期を「八世紀末、つまり天平末か平安時代初頭」とされた²³⁾。

唐招提寺薬師像と金堂本尊像との間を埋める作例としての鶏足寺像の存在は重要であろう。つまり鶏足寺像に近い量感表現をもつ金堂本尊像の制作が九世紀前半に遡る可能性は、言下に否定されるべきことでもないのではあるまいか。鶏足寺はかつて天台寺院であり、彼像が天台系造像の一作例であったか否かについても興味を持たれる。

三 賢璟の修学と金堂像造像への道筋

最後に賢璟の修学と彼に大きな影響を与えた鑑真の仏教について一瞥して稿を閉じたい。

賢璟は、天平勝宝六年(七五四)二月三日、河内国序において鑑真一行を迎え礼謁し、同年四月には旧戒を捨て、東大寺の戒壇において鑑真より具足戒(三師七証の十師による受戒)を受ける²⁵⁾。加えて、天平宝字三年(七五九)、賢璟は唐招提寺に一切経を寄進しており、佐

久間竜氏は、そのことから賢璟の鑑真への深い帰依を推測される²⁷⁾。

『宋高僧伝』『唐揚州大雲寺鑑真伝』によると、鑑真は、道岸から菩薩戒を受け、恒景(弘景)を戒和上(道岸は教授)として登壇受戒して比丘になつて²⁸⁾いる。道岸は、同「唐光州道岸伝」によると、文網の弟子であり、四分律を堅く修し、禅慧(定慧)に深く入つたとある。

文網は道宜の弟子であるとともに、四分律宗の別派である法礪宗を受け継いでおり、道岸はそれらを相伝したものと考えられる。東野氏によると、道岸が鑑真に授けた菩薩戒は、四分律などの小乗戒の考えを取り込み、大乘仏教のための戒律として中国で考案されたものであるが、菩薩戒そのものは天台の教えと深く関わるという³⁰⁾。一方、同「唐荊州玉泉寺恒景伝」では、弘景は初め道宣の弟子文網から律を学び、その後玉泉寺に入り智者禪師(智顛)を追って止観を学んだと伝えられる³¹⁾。しかも、『荊州南泉大雲寺故蘭若和尚碑』(蘭若和尚||惠真以下、「惠真碑」)は、弘景が弟子惠真の要請により南玉泉寺に止住したこと、また「昔、智者大師(智顛)、法を衝岳の祖師(慧思)に受け、蘭若和尚(||惠真)に至つて六葉である」と記す³²⁾。

関口眞大氏によると、『諸家教相異略集』が一行阿闍梨につき、章安↓道素↓弘景↓一行という相伝を記すことなどから、惠真碑に、惠真にいたつて六葉なりといつて³³⁾いるのは、南岳(慧思)↓天台(智顛)↓章安(灌頂)↓道素↓弘景↓惠真の師々相承を指し、それが「天台山系」に対する「玉泉寺系」の天台宗相承と考えられるという³³⁾。これらを考慮すると賢璟は鑑真を通じて、弘景の玉泉天台の思想を継承し

た可能性が十分であろう。

ところで鑑真が来日した当時のわが国の僧綱の構成は、僧正・菩提僊那、少僧都・良弁、律師・道璿と隆尊などであるが、この中で道璿もまた鑑真と同様に、玉泉天台を継承した可能性がある。彼は普寂を師とする北禅宗の門下の僧侶であるが、普寂（＝「大照大師」）は律を弘景に学んでおり、智顛→弘景→普寂→道璿という相承が認められるからである。

天平八年（七三六）、道璿は僊那とともに、戒師として我が国に招聘され、来日後は大安寺に止住している。戒師招請は興福寺を中心に計画され、その任を帯びて入唐したのは、興福寺栄叡と普照であるが、その計画の立案者は、天平元年に一人僧綱入りし、天平九年（七三七）まで興福寺に在籍した道慈であるとする見解が有力である。⁴⁰

賢璟が、道慈の思想の影響を受けたことは、すでに前稿で述べたところで、⁴¹彼は道慈が中心となって創建された大安寺に止住して道璿や僊那のもとを訪れ、ここでも戒律や禅、さらには玉泉天台などについて修学したであろう。これが鑑真との邂逅でさらに深化したものと考えられる。

おわりに

金堂本尊について、従来その造像の推進者とされてきた円修の事績を検討し、さらに室生草創期に関わった賢璟の足跡を改めて確認する

とともに、あわせて奈良時代以前の中国天台教学のわが国への請来経緯を考察した。

前身寺院を創建し、室生山寺の整備に寄与した賢璟の役割は大きい。また、その思想修学の過程で得た天台思想は、やがて室生に天台の素地を形成する端緒となったことであろう。そうした基盤が、やがて金堂本尊造立への理念形成につながった可能性がある。そうした天台の素地は、さらに修円、円修へと継承されて金堂像造立へと繋がったものと考えられる。

周知のとおり金堂には本尊のほか、十一面観音立像などの諸像や「伝釈天曼荼羅図」などが安置されており、現・三本松安産寺の地藏菩薩立像は、かつて室生寺の金堂に安置されていた。それらの像につき、本稿では触れることができなかった。

もちろん本稿自体の課題も少なくない。金堂本尊が円修留学前に造立された可能性をより確かなものにするためには、さらにその前提となった室生山寺やさらにその前身寺院の諸像を明らかにするのが肝要であろうし、なによりも「前身寺院」における造像が如何なるものであったかを明らかにしなければなるまい。あるいは現金堂本尊の前身となるべき尊像の存在も考慮すべきであろう。今後に残した課題は大きい。これらはさらに後考において些少なりとも解決に資したい。

注

（一）久野健「板光背像について」（『平安初期彫刻史の研究』、吉川弘文館、一九七四年）、三一六、三一九頁。

- (2) 毛利久「室生寺伝釈迦像の性格」(『日本仏教彫刻史の研究』所収、法藏館、一九七〇年、一三〇頁。井上一稔「室生寺金堂本尊像の由来」(古寺巡礼奈良6『室生寺』、淡交社、二〇一〇年)、一二二頁以下。同氏「室生寺の歴史と宝物」(『奈良・国宝 室生寺の仏たち』特別展図録、仙台市博物館、二〇一四年)、一三五頁。
- (3) 拙稿「初期室生寺に関する一考察」『一山年分度者奏状』の解釈を中心に(『奈良大学大学院研究年報』二五号、二〇二〇年)、一六一頁。
- (4) 賢璟の入滅については、『僧綱補任』延暦十二年癸酉条(『続群書類従』第二十七輯上)、四九三頁。
- (5) 金堂本尊の概要については、水野敬三郎氏による、実際に基づいた本像に関する詳細な調査がある(同氏「薬師如来立像伝釈迦如来立像」『大和古寺大観』第六卷「室生寺」、岩波書店、一九七六年)。以下、本論に必要な範囲でその要点を記す。
- 像高は、二三四・八センチメートル。衣は極めて薄くあらわされ、この薄い衣を通して肉身の起伏が表現される。衣の正面の襷は肉身のふくらみを強調するように細かく平行な弧線としており、所々に衣の折返しを、時には旋転文として配する。法衣の彫法は、その上部をやや深く垂直に彫り込んだ丸みのある稜線、次に小さくしかし鋭く角の立った稜線を二回繰り返す、この三本の稜線をひと組とし、これを繰り返すもので、漣波(複翻波)式と呼ばれる独特のものである。衣文自体の彫りは極めて浅いが、稜線に関しては彫りが鋭く、その峰に截金がおかれる。
- 肉身部では面部及胸腹部は布貼り黒漆地として、もとはこれらの全面に黄土彩が施されていた。法衣は白土地ベンガラ彩で正面ではやや茶色がかった赤色を呈する。稜線のうちそれぞれやや太い峰に挟まれた日本の鋭く尖ったに沿って切金がおかれている。この像は、いわゆる「朱衣金鉢」の像と考えられる。
- 光背は、周縁部の先端を唐草文で埋め、その間に化仏坐像七軀を配する。そのいずれも像本体と同一印相のもので、七仏薬師を表したものと見ることが出来る。
- なお、像高以外の法量は、次のとおりである(単位はセンチメートル)。
- 頂一顎四三・一 面長二五・〇 面幅二三・六 面奥三四・八 耳張三二・三 臂張七九・一 裾張七一・〇 足先開三六・七(外側) 光背高三三五・〇 光背幅一五七・四 光脚高三一・五 光脚幅一三〇・七
- (6) 注(2) 毛利論文、一二二―一二三頁。注(5)、三〇頁など。
- (7) 『阿婆縛抄』第四十六「薬師」(『大正蔵』図像編第八卷)、一〇四九a。
- (8) 津田徹英「平安密教彫刻論」(第三章 室生寺金堂本尊私見)、中央公論美術出版、二〇一六年)、一一五頁―一二七頁。氏は、金堂本尊を薬師如来像と見ること完全には否定するものではないと述べられる一方で、金堂本尊は、「伝承通り釈迦如来像であり、それが祈雨儀礼の『仁王経』読経・転読の本尊として造顕された」可能性を指摘される。また、佐々木守俊氏と長岡龍作氏は、「仁王会本尊像」(奈良国立博物館蔵)を取り上げられ、中央に薬師如来、左に僧形、右に十一面観音の三尊構成を考えられる(佐々木守俊「室生寺金堂十一面観音立像」『週刊朝日百科国宝の美14 彫刻6』・一八―二〇頁、二〇〇九年。長岡龍作「室生寺での祈りと金堂の仏像」『奈良・国宝室生寺の仏たち』・一四六―一四八頁、仙台市博物館特別展図録、二〇一四年)。これらの点は、後の論稿で言及する予定である。
- (9) 『天台座主記』は次のように記す(『続群書類従』第四輯下)、五七〇頁。同(天長)十年己癸七月四日義真入滅
- 以院内雜事讓授弟子円修私号座主然而大衆不許上奏於公家仍勅使右

- 大弁和氣朝臣真綱登山止其職因之円修移住大和国室生寺云云。なお、(天長) は筆者。
- (10) 注(6) 毛利論文、一二五頁。
- (11) 注(6) 毛利論文、一二四頁。
- (12) 『九院仏閣抄』(『群書類従』第二十四輯 卷第四〇)、五七六頁、など。
- (13) 『続日本後紀』天長十年(八三三)十月二十日条(『国史大系』第三卷)、一六頁。
- (14) 注(3)。
- (15) 中尾俊博氏によると、「最澄は最初法華最第一の天台法華宗の確立をめざして入唐求法した」が、他方において、留学先の天台山で「密教・禪・戒律を包容した玉泉天台系の天台学を道達を通して知った」可能性があるという(「室生天台の萌芽」その二『密教学』第二十五号、種智院大学密教学会、一九八九年)、一九頁。
- (16) 嵯峨井建「日吉信仰」(特別展『神仏います近江』所収、大津市立歴史博物館など、二〇一一年)、二五頁。
- (17) 注(1)、三一九―三二〇頁。
- (18) 注(2)。
- (19) 注(1)。
- (20) 東野治之『鑑真』(岩波新書(新赤版)、二〇〇九年)、一五七頁以下。なお、雕檀師とは白檀などの彫刻を行う工人のことである。
- (21) 前稿において、賢璟は宝亀前半に室生前身寺院を創建したことを考察した(注3)。とするならば、賢璟は唐招提寺薬師像を参考にし、前身寺院の尊像の制作した可能性がある。
- (22) 『興福寺官務牒疏』によると、鶏足寺のある己高山の周辺には「己高山五箇寺」とよばれる寺院が存在していたが、この像はそのうちの法華寺に安置されていた。
- (23) 西川杏太郎「近江の仏像」(『日本の美術』第二二四号、至文堂、一九八五年)、二二―二三頁、第1図、第35図。なお本像は、像高一八一・六cmの等身像である。
- (24) 注(23)、23頁。
- (25) 『唐大和上東征伝』(藏中進『宝曆十二年版本唐大和上東征伝』「和泉書院影印叢刊⑫」、一九七九年)、一〇三頁。
- (26) 『扶桑略記抄二』天平宝字三年八月三日条(『国史大系』第十二卷)、一〇四頁、など。
- (27) 佐久間竜「日本古代僧伝の研究」(吉川弘文館、一九八三年)、一六九頁。
- (28) 『天正蔵』第五十卷、七九七b。
- (29) 『天正蔵』第五十卷、七九三a c。
- (30) 注(20)、二五頁。
- (31) 『天正蔵』第五十卷、七三二b。
- (32) 『欽定全唐文』(一三) 卷三百十九、匯文書局、四〇九四頁下。
- (33) 関口眞大「玉泉天台と日本天台」(『天台止観の研究』第三章二所収)、一八六―一八七、一九四頁以下。鑑真への相伝とその人脈につき東野氏の図表を参考にした。注(20)、二二頁。
- (34) 『統紀』天平宝勝宝三年四月二十二日(『国史大系』第二卷)、二二二頁。
- (35) 『内証仏法相承血脉譜』『道璿和上伝纂』(『伝教大師全集』第一)、一四頁。『律宗綱要』巻下にも、「道璿大徳戒律華嚴。台教北禪。」とある(『大正蔵』第七十四卷)、一七c。
- (36) 『天照禪師塔銘』は「依東都端和上受具転奉南泉景和上習律」と記す(『欽定全唐文』(一一) 卷二六二、匯文書局)、三三六〇頁。
- (37) 『統紀』天平八年八月二十三日条・十月二日条(『国史大系』第二卷)、一四一頁。
- (38) 道璿につき、注(35)、一三三頁。僊那につき、弟子修崇撰『南天竺婆羅

門僧正碑并序』(神護景雲四年〔七七〇〕四月二十一日)に、「勅住大安寺。」とある。

(39) 注(25)、八三頁。なお、そのときの遣唐使につき、『統紀』天平四年八月十七日、同五年三月二十一日、四月三日条など(『国史大系』第二卷)、一三九、一三二頁。

(40) 佐久間竜「戒師招請について」(平岡定海・中井真孝編『行基鑑真』日本名僧論集第一巻・二六四頁、吉川弘文館、一九八四年)。注(20)、四八〜五〇頁。

(41) 注(3)、一六三〜一六二頁。

(42) 現在、十二面観音立像と地藏菩薩立像、そして十二神将像のうち六軀は、寶物殿に収蔵されている。

〔後記〕

この拙稿を書き終えることができたのは、奈良大学原口志津子教授をはじめとする先生方からのご指導の賜物にほかならない。特に執筆にあたっては、奈良大学関根俊一教授にご教示を賜った。末筆ながら記して謝意を表する次第である。

〔図版出典〕

写真1〜4 『大和古寺大観』第六巻「室生寺」所収・五四〜五六、八六頁。

写真5 『奈良六大寺大観』第十三巻「唐招提寺」四〇頁。

写真6 『日本の美術』第二二四号「近江の仏像」一頁。

Summary

About the Production background of Syakanyorai(Yakusinyorai) statue at “Murō-ji Kondo”

Hitoshi Oota

The principal image of “Murō-ji Kondo” was pointed out possibility of the image inherited “Tendai” system, and intake of Asian continental style. Currently influential, the principal image was produced after returning from studying abroad in “Tendai-san Mountain”.

But, Analyzing the achievements of “Enshu” after entering the “Murōsan-ji”, It cannot always be proved that the principal image was produced after returning to Japan. Rather, we should actively consider the possibility that it was produced before studying abroad.

So first, I consider the buddha statues from the late Nara period to the early Heian period that inherit the same continental elements as the principal image of Murō-ji. Continued, About “Kenkyō” who was founded the “The Predecessor Temple” of Murōsan-ji, I would like to discuss buddha background of principal image of Murō-ji by finding opportunities to accept Tendai-Thought and ingest Asian continental style of “Kenkyō”.

Key words : “Yakusinyorai” statue of Star Figure of Murō-ji Temple, Kenkyō, Ensyu